

目的 アパレル分野に於いて、人体の身体情報の把握は基礎的要件であり、これを如何に敏速、正確、容易に行うかに焦点が当てられる。前回に統いて有効な方法の一つとしてアプリケーションソフトを用いディスプレイ上に三次元形態把握を行うものである。データ入力には汎用性の高いディジタイザー入力法を用い、出力画像上、さらにその画像からのデータ採取等に於ける有効性および実用性範囲の検討を目的とした。

方法 ディジタイザー入力のための資料として、石膏体右側体幹部形態を被写体とし、モアレ織写真撮影を行った。この場合写真上のモアレ織の様相がそのまま入力データとなるため、映像化された形状への影響が大きく、従って構図上の配慮が必要となる。本実験では正前面、正側面、正後面の順に互直角による三方向からの写真撮影を行った。この資料を基に投影図、投影断面図、断面形状図を描画させ、さらに各断面上の構成ラインを得た。また同被写体（石膏体）をスライディングゲージ法によって実計測を行い、水平、垂直断面形状を得、先の同位における構成ラインとの比較検討を行い、ディジタイザー入力法による有効性範囲を確かめた。

結果 コンピュータグラフィックス断面形状、およびスライディングゲージ法実計測断面形状との比較において幅径、厚径、周径の結果はほぼ同一の成績が得られ、統計分析の結果からも高い評価が得られたことによりデータ採取の実用性を大きくしていると言える。